

材料及び薬品学、化学

色彩学、印刷術

数学、物理学

化学、化学実験

化学

図案

絵画及び図案

これらの外に各科共通科目の修身、外国語(英語)、美学、体操があった。のちには森芳太郎(大正四年嘱託、同九年臨時写真科教授)が数学、化学分析等を教え、小林亀五郎(大正六年助手、同八年製版科助教)が製版実習を担当する。

主任教授の結城林蔵は明治二十二年以降陸軍省の陸地測量部や砲兵工廠の用務に従事し、同三十三年から東京高等工業学校に勤務。同三十五年から同三十八年までドイツ、オーストリアに留学して製版術を学び、帰国後は本務の傍ら勸業博覧会や農展その他の審査員をつとめた。草光信成(大正五年西洋画科卒)は、

大正五年春頃、東京美術學校に藏前高工の寫眞科と製版科が合併されてあつた當時、製版科の主任教授、結城林蔵先生が、西洋畫科在學々生の爲に、エッチング講義を一學期講ぜられた事がある。西洋畫研究の爲にエッチングを無視してならない熾烈なる主張であつたが、當時はポスト・アンプレッシュヨニストの心酔末期でも餘り聴講の人が講義室に充たなかつた。中村研一君が丁度レ

教授 鎌田 弥寿治

嘱託 矢野 道也

同 笠原 留七

同 小柴 英侍

雇 鈴木 宮吉

教授 鹿島 英二

同 岡田 秀

ムブランド研究に没頭して居る時で、相當その趣旨に應じて小品佳作を擧げて製版學生の參考にもなつて居た様だつた。實技の指導は現高工藝の伊東教授であつたが、吾々のクラスでは清水良雄君始め第一美術の古澤兼三郎それから遠山教圓、宮地茂君なども聴講實習された様に思ふ。獨立の鈴木保徳君も居られた様な気がする。〔下略〕

〔『エッチング』第四十二号。昭和十一年四月〕

と述べており、結城と伊東亮次が西洋画科生徒のためにも一時期エッチングを教えたことがわかる。しかし、製版科の教育は機械製版、印刷を旨とするもので、折りから急速に高まりつつあつた創作版画運動とは無関係であつた。

三、予備科の各科分属

従来の規則(明治三十八年改正)では、修業年限は予備科(一学期間)、各科一〜四年、各科卒業期(二学期間)の計五年間とされ、予備科生は一樣に「毛筆画実習」「木炭画実習」「塑造実習」「用器画法」「歴史」「外国語」「体操」を受講することになっていたが、今回この予備科が各科(製版科を除く)に分属せられ、各科ごとの予備教育を行なうかたちとなった。

⑪ 東京高等工業学校工業図案科その他の生徒の教育委託

大正三年九月五日発布文部省令第二十五、第二十七号により、本校は東京高等工業学校の工業図案科生徒(第一年より第三年までの五十四人(製版特修生を含む)、選科生十三人(同上)、研究生)と附設工業教

員養成所工業図案科生徒（第一年より第四年までの八人（同上））および附屬職工徒弟学校製版科生徒（第一年より第三年までの十二人）の教育を委託された。そして、九月十一日から工業図案専攻生は新築煉瓦造二階建の校舎の二階を、また、製版専攻生は工芸部校舎裏手の新設製版科教室を使用して左記の教師の指導のもとに従来どおりの勉強を続けることとなった。

（発令月日）

（担当科目）

松岡 寿	九・二三	東京高等工業学校教授兼東京美術学校教授	図案・図案法・西洋画
結城 林蔵	同	同	製版術・製版用写真実習・光化学・製版実習
鹿島 英二	同	同	図案・工芸史
安田 禄造	同	同	図案
伊東 亮次	同	東京高等工業学校助教授兼東京美術学校助教授	写真術大意・写真実習・製版術・製版実習
矢野 道也	一〇・二	東京美術学校嘱託・印刷局技師・元東京高等工業学校嘱託	色彩学・印刷術
笠原 留七	同	東京高等工業学校教授兼東京美術学校嘱託	数学・物理学

これは東京高等工業学校の手島精一校長と文部省、本校校長正木直彦の三者間でなされた決定に基づいてとられた措置であった。当時、高等工業では単科大学昇格の準備を進めつつあったが、そのための教育体制整備の一環として手工的性格の強い工業図案科と製版部門を廃止し、代わって大阪高等工業学校の窯業科を自校の窯業科に併合することとした。そして、製版部門の組織は以前から製版科新設を要請していた東京美術学校に移し、同時に製版部門と工業図案科に在籍していた生徒が全員卒業するまで、その教育を東京美術学校において行うことを正木校長に委ねたのであった。

しかし、この決定は前触れもなしに発表されたため、関係者の間には大きな動揺と反発が起こった。新聞はそれを次のように伝えている。

○高等工業は帝大工科と合併に決す

一木文相と手島校長の密約

高工在學生の間に紛擾起る

數日前より一木〔喜徳郎〕文相を東京高等工業学校手島精一氏との間に密約成り浅草藏前なる高等工業学校を帝大工科の一部として單科大学と爲す事に本月末發表する運びに至れり〔實際には昭和四年まで延期〕然るに従來高等工業には圖案科〔工業図案科〕の一科ありて既に卒業生も出し現在七十餘名の在學生ありて之を單科大学に存屬するは不必要なりとて文相手島校長の協議にて同科在學生を上野

△美術學校圖案科に合併せしむる事に決定したり 之を聞知したる同科學生は大に驚き急遽撤を飛ばし廿一日反對大會を開き善後策を議し委員を擧て手島校長を訪問し反對意見を陳情せんとしたるに手島校長は病氣と稱して面會を避けたれば委員等は止むなく文部省に松浦〔鎮次郎〕専門學務局長を訪問し陳情する所ありたり 其大要は元來美術學校圖案科には工場設備なく又同校卒業の曉には美術方面の圖案としては可ならんも

△工業上の圖案としては全然價值なきものにして總ての利便に乏しく吾等の當初より工業學校圖案科を選びたるは實習場の設備ありて將來諸工業との關係を存續し得る特典あればなり 此既得權

を全然剝取され將來社會に出でたる後不便を感じる美術學校に合併さるゝは理不盡なり 萬一此の合併問題が既に決定され變更し得られざるものならば上野より工業學校に通學するも可なれば

△實習權を確保されたしと云ふにありて局長も大いに同情し自分は斯かる問題に對しては當然干與すべき位置にあれども事實決定したるを知らず自分に一言の相談もなく俄然合併を決定するが如きは異例にして寧ろ憤慨し居りしなり 尙ほ實習場にて教授を受けたしとの要求なれば容れられざる事も非ざるべしと挨拶したり

越えて二十二日手島校長側の情報に依れば在學生の

△既得權を尊重するの意味より美術學校に合併したるものにて夫れ以上實習したしとの要求は許容する能はずとありたれば同科學生は茲に益々激昂し卒業生の同意を求め來廿五日頃には反對大會を催さんとして寄々協議中にて雲風頗る穩かならざるものあり

(大正三年八月二十三日『国民新聞』)

○圖案科と窯業科

東京高等工業學校の圖案科にては文部當局並びに東京美術學校と協議の結果美術學校の同科と合併に決し愈よ來る九月の新學期より實行せらるゝ事となれり、右の結果、圖案科受持の高工側の教授助教五六名は當然美術學校の教授助教たる可く又た美術學校の同科は修業年限は四年なるに高工は三年なれば高工より移りし學生は三ヶ年にて高工より卒業證書を與ふる事となる可し 又た東京高工の窯業科は日本窯業界に貢獻せる所少からざる獨人ワグネル氏を中心として成りたる歴史的因縁もあり旁々大阪高等工

業學校の同科は今回東京高工の窯業科に合併することとなり同科學生廿餘名は東上して九月新學期より教授を受ける事となり、されば東京高工に取りては圖案科は失ひたるも大阪より窯業科を併合し得たる次第なり 尙ほ右圖案科の合併に付きて高工側の卒業生中之を喜ばざるものありしも手島校長等の説明に由り氷解する所あり滞りなく九月より實行せらる可しと

(同年同月二十八日『日本新聞』)

これらの記事は工業圖案科の動向のみを伝え、製版部門については触れていないが、後者は東京美術學校の製版科として再出発することになっていた。それに対して前者は東京美術學校圖案科に「合併」するとは言え、これまで合併計画が示されたことは一度もなく、事前協議も全くされなかったもので、大きな反発を招き、特にマスコミを騒がせるような結果になったものと思われる。

記事によれば工業圖案科の在校生は手島校長に慰撫されて決定に従った様子であるが、教師たちが受けた衝撃には打ち消し難いものがあった。例えば、当時同科科长であった松岡寿は『松岡寿先生』(編集兼発行者代表安田禄造。昭和十六年。オーム社)所収の手記の中で次のように述べている。

顧みれば大正三年九月五日、文部省令に依りて我工業圖案科の廢止を公示し、且つ、現在學生の教務を東京美術學校に依托せられてより、茲に一周年、當時を追想すれば轉た感慨に堪へず。

大正三年七月二十日登校して、例の三階の室に入ると間もな

く、會議室へ來て呉れとの教務掛よりの電話により、早速其所へ行て見ると、豫て設けられてある規則改正調査委員會が開かれてあつて、阪田、三守、吉武の特別委員より、圖案科の規則改正に關し意見を徴せられた。そこで自分一個の意見としては今爰に述べ得るも、自分は昨日漸く旅行先より歸りしばかりの處で、今日此會議のあることも、更に承知せざりし様な譯であるから、未だ何等科員の意見も聽て居ない故、何れ科の協議を経たる上、科の案として具體的のものを提出すべき旨を述べたるに、然らば其事を至急運び呉れとの委員よりの依頼が有つた。自分は乃ち直に鹿島、安田の兩教授に宛て、至急協議を要する事あるに付き、明朝九時登校ありたき旨の書面を出し置きて、翌朝登校したる所、鹿島、安田兩氏の出校に先だち、手島校長より突然、今回圖案科を廢止し、現在の學生は美術學校へ併合することに昨日文部省に於て決定相成りたれば、左様心得られたし、且つ美術學校へ引繼ぎに關し詳細の事は、同校校長と直接打合を爲すべしとの申渡しを受けた、實に晴天の霹靂とも云ふべく、自分は愕然たらざるを得なかつたのである。其内に登校せる鹿島、安田兩教授に對し今朝登校を煩したのは、昨日規則改正委員會の結果により、圖案科の規則改正上に付き協議を乞ふ積りであつたが、其必要は只今消滅したのである、其譯は斯々と如上の次第を告げたるに、兩氏に於ても非常に驚き、且つ感慨無量の様子であつた。

自分が昨日の會議に於て圖案科の改正を論じつつあつた時には、既に文部省に於ては、廢止の事を決定せられてあつたのである。其を知らざりし自分の迂遠さにはあきれざるを得ない、實に

斯かる大事變を豫知し得ざりし不明に付いては、只慚愧の外はない次第である。圖案科廢止の報一度卒業生間に傳はるや、卒業生諸君は蹴起恰も祖國の難に赴くが如く馳せ參じ、忽ち同窓大會を開き、其決議によりて小室、永井の兩君は、卒業生を代表して當局を訪ひ、廢止及併合の處置の不當を説きて反省を求め、又首相を訪問して情狀を訴ふるなど、極力運動に盡されたるも遂に其効なかりしは甚だ遺憾^憾千萬である。

又學生及父兄側に於ても總代を派して當局に對し、若し廢止及併合の事が既に決定動かし難きものとすれば、已むを得ざる次第に付き、此上は何卒從來の方針によりて授業し、工業學校の名を以て卒業せしめられたしとの請願を爲したるに、之れは數回の交渉の末遂に當局の容るゝ所となり、於之九月五日文部省令を以て、工業圖案科は三年間存置し、其教務を美術學校に依託すべしと公示され、而して同月十一日よりは美術學校の方に於て、授業を開始すべく直に移轉を命ぜられた。其所で鹿島教授は荷造より運搬、先方に於ける受入れに至る迄、總て之を一人で辨じ他に一人の手傳もなく、實に忽々の中漸く移轉を了したのであるが、恰も厄介拂ひをしたる者が、濫々引受けたる主人の許に、居郎に入りし感があつた。而して從來四名の專任教師によりて専ら教授を擔當し、其附帶事務は専ら教務、庶務掛の分掌に屬せしを、移轉後は專任教員は二名に減じ、加ふるに給仕さへも廢止せられ、而して是迄教務掛に屬せし類の仕事も、自ら辨ぜねばならぬ場合ありて、丁度、妻を失ひ使用人を失ひ、家財を失ひたる者が、多くの幼兒を擁して、所帶を持ちし様なものである。

斯様にして教授の全きを得ることは、到底望み難きことで、慘々なのは學生である。學生諸氏は、高工たるが故に之れに志し、幾多の時日と學費とを費して、卒業を期待しつつあつた者である。殊に新入學生の如きは折角競争試験を経過し、受験料を費して漸く入學し、未だ一回も教授を受けざるに先だち、既に廢止の厄に逢ふたので實に氣の毒千萬である。

偕て廢止の原因に就ては種々の浮説を耳にするが、然し公示されたる理由の通り、行政整理の爲めであるとすれば、何故に獨り我圖案科に限り、現在生徒の利益を犠牲にしてまで、差急に之を廢止して、僅かなる該料の經費を除かねばならぬ必要がありや、甚だ疑問である。圖案科の爲めに要する費用は、實に僅少なるもので、學校全體の經費の百分の一にも當らぬ位のものであると思ふ。然るに今同科を廢止して、之を美術學校に併合せるに付ては經費の節減よりも、反て無益の費用の増加を見るべく、加之教育上に意想外に、大なる不利不便を來せることは明らかである。果して經費の節減の爲めであるとすれば、圖案科の如きは大海の一滴である、此科の經費を節する前に、先づ整理して、一層多額の節約を爲し得る道があると思ふ。

若し又學科の統一と云ふ點より、高工と美校と、東京に二つの圖案科を設け置くは無益なりとの理由によりて、廢止併合が行はれたのであれば、之れ恰も正宗も葡萄酒も等しく酒なれば同一容器に入るべしと云ふの類にして、能く兩者の性質を究めず、唯皮相の觀察によりて、同一物なりと速斷せるにあらずやと疑はざるを得ない。

抑も我が高工の圖案科の主義目的は、普通商品に應用すべき圖案の研究を爲すにありて、即ち所謂工業圖案で、普通實用品の美化を計るのが目的である、而して美術學校の圖案科は、全く美術本意で、所謂一品一物主義であつて、彼等の間に名は同じ圖案科であつても、其目的の上に多少相違があり、従つて自ら各特色と、特別の使命を有して居る譯である。全體此の工業的圖案の研究に就ては、歐洲に於ても近來頻りに、其の必要を唱道せられてゐる。現に佛國の如きも、圖案の教授の方針として、現在實施せられてある所は「美を標準とせずして、實用を目的とすべし」と云ふにある。又彼國に於ては獨逸、其他諸外國の商品の爲めに、市場を侵略せられつつあるのに對し、識者は論じて曰く「吾人が曾て奢侈的物品に重きを置き、工藝美術品の製作に偏して、普通實用品の美化を計る上に、深く注意せざりしは大なる誤りであつた、獨逸其他諸外國より輸入し來る工業品を驅逐し、貿易の發展を期せんとするには、専ら普通日用品と、美との調和を計るを以て最急務と爲す」と。又彼國の圖案の大家の言に斯う云ふ事がある、「總て物品の製作に付ては、吾人の生活上に必要且つ便利の點を第一の要件と爲す、此の要件を満足に充たしたる後に於て始めて圖案の力に依りて美觀を供へ、以て快感を與へ得るものとなさざるべからず、實に美は便利及實用の補佐である。即ち必要より形狀を生じ、物質を生じ更に裝飾が生ずると云ふことが工業圖案の眞理であり、且つ永久の成功である」と。

斯様に歐洲に於ても、圖案應用の目的を専ら實用品の上に置かんとしつつある有様である。即ち我工業圖案科の主義方針と、一

致して居るではないか。又現在我國の商工業界に於ても、工業的製品の上、意匠圖案の必要を切りに感じ來りしことは、商工業者が頻りに賞を懸けて、圖案の募集をなすに見ても明らかな事實である。而して此の實業界の現状に對しては、我圖案科は少からず貢獻して居るのである。今日迄我國に行はれたる、博覽會、展覽會、懸賞募集に於て、其出品圖案中所謂工業的圖案にして當選に入りしもの、大部分はいつも我が圖案科の出身者若くは在學者の手に成る所のものであつた。近き例を舉ぐれば、電氣局の募集せる電車切符の懸賞圖案的如き、七名の當選者中五名迄、我圖案科出身者及在學生であるではないか、其他卒業者は學校、商店、工場と官廳と各方面に於て活動して居る。

我圖案科は、十七年前の創立以來今日迄に、卒業生を出した數は百七十五名にして、毎年入學志願者は十名の募集定員に對し、五十名以上であつた。美術學校の圖案科は我圖案科より一年前の創立に係り、且つ入學試験科目は少なく、甚だ簡易なるに拘らず、卒業者の數は七十四名にして毎年の入學志願者は、矢張り十名に對し三十名内外である。又京都高等工藝學校圖案科の入學志願者は募集定員四十名に對し、八十名の割であると云ふ。即ち我が圖案科は募集定員の五倍、美術學校は三倍、京都高等工藝學校は二倍の志望があつた譯である。

如上の狀況にある我圖案科を廢止して、現在學生を美術學校に併合せるは、果して學制統一の實を顯はせるものと云ひ得るであらうか、是亦甚だ疑問である。

今や當局者は國產獎勵の必要を唱へ、國論又貿易發展の急務を

論じつゝあり、就中貿易品に付ては、從來の如く、美術品や、骨董的のもののみを以て、唯一の日本の特産物と心得て居ては、到底大した發展は期し難い。美術品や骨董品は、一時の好奇心を挑發し得るも、決して永續した大なる量の需要に應ずるものではない。貿易品としては、必ずや輸出先きの人情風俗に適應せるものにして、而も好ましき觀を備へたる日用の實用品を以てせねばならぬ。此の目的を達せんにはどうしても圖案者の意匠に待たねばならぬことは、獨佛の例に見ても明かなる事である。然るに今此の實用品に應用する圖案の研究を、専ら主義とせる我圖案科を廢止せるが如きは、實に内外實業の趨勢に背馳せるものにして、何れの方面より考察するも不當の所置であると云はねばならぬ。

然りと雖ども、我圖案科は絶対に高工に屬すべきものなりと云ふのでは決してない。素より該校に在るも、決して吾人の理想とする所の圖案研究は望み難いことであるが、唯今日の場合にありては、比較的高工に屬するを以て有利なりとするのである。放縱的校風を有する純正美術家の養成所に、工業圖案者の養成を托するが如きは、誤れる處置であると思ふ。要するに、必ずや他日圖案及應用を専門とする所の獨立の工藝專門學校が起らねばならぬ。加之工藝博物館の設立なども圖案の進歩發達を計る上に急務な事である。其機運の一日も速に到來せんことを希望して止まざる次第である。

なお、この手記に続けて編者は次のように記している。

この事件の時手島校長は職員の進退に付き、安田氏は一人學校に止め置くが、他の職員は皆美術學校の方へ轉任せしむる、而して先生の事に就ては波多野氏を以て次の様に告げられた。

波多野氏曰く「美術學校の方には高級の豫算が無いので、轉任の事に運べないから、現在の生徒が卒業後は辭職して貰ひたい。松岡君は最初自分から依頼して就任して貰ふたのであるから、云ひ出しにくいと、校長は云ふてゐられるから自分から傳へる」と。

手島校長は、この大變革案を極く祕密裡に進行して、全く確定した所で先生に話され、生徒が騒ぎさうな氣配が見えると、どうか生徒が騒がないやうにして、美術學校の方に移轉手続きを正木校長と相談して運んでくれと云はれた。

上述の成行きから先生は、大正三年九月二十三日東京美術學校教授を兼任することになり、翌年依願免官になられ、大正六年九月迄講師として關係せられたのである。

これは工業図案科の廃止が同科教師に全く相談もなく急決決定されたものであり、松岡がそれに対して強い憤りを感じたことを示している。また、「放縱的校風を有する純正美術家の養成所に、工業圖案者の養成を托するが如きは、誤れる處置である」と言い、生徒の本校への委託にも反対したことがわかる。

さて、工業図案科廃止と生徒の教育委託が公示された次の日の『報知新聞』には、本件に関する文部当局の次のような説明が掲載された。

從來圖案科は高等工業學校と美術學校の双方に存置し兩校共略同程度の意匠圖案を授けてゐたので敢て双方に置く必要もあるまいと先般來兩校の間に種々交渉の結果今回統一して美術學校に併合することとなつたのである。尤も此併合の發表に先立ち高等工業の學生は早くも之が下相談のあることを聞知し若し此の事が決定されるに於ては美術學校のために自分の領分を奪取されるかのやうに思ひ誤り不平を起した生徒もあつたと云ふことであるがこれは理由のない事と思ふ、中には工業圖案科は高等工業に置いた方が實地の應用をする場合多くの便益を得られるやうに主張する者もある様だが併し此の科目は實地の應用を主とするは勿論のこととたけれど研究の方面も應用の方面と殆ど同程度に重きを置くべき必要のあるものだ。之は寧ろ彫刻鑄金鑄造等^{彫力}高等工業に比して比較的美術的方面の應用範圍が廣い美術學校に移し同時に同校在來の圖案科を一層遺憾なき程度のものに擴張した方が意匠圖案の進歩を計る上に便益が多からうと云ふので今般愈々併合を實行するに至つたのである。

ここに、工業図案科を東京美術學校の図案科と合併して科を拡張する方が意匠圖案の進歩を図る上で便益が多いとする見解が示されており、工業図案科廃止の理由もはっきりする。文部省、手島、正木の三者は右の理解において一致し、工業図案科を製版科同様に本校において復活させることを前提として一旦廃止したのであった。正木は常に工芸、圖案教育の近代化に留意していた人であり、特に當時は東京美術學校の図案科に対して、「到底近代青年の歸嚮に添

はない」とか、その教育法は「十年昔と何の變りもなく重箱とか蒔繪厨子棚の如き現代社會に何等の交渉もない調度を後生大事に」している（『学生の領分・東京美術学校 廿二』土耳其帽。大正三年二月三日『時事新報』など）といった批判が高まっていた折りから、むしろこの機に乗じて図案教育の改革を進めようとしたのではなからうか。工業図案科の組織をひとまず東京美術学校へ移し、追って同科復活の方法を講じようとしたものと考えられる。

しかし、東京美術学校の内部では工業図案科の復活に反対する意見が強かった。例えば『黒田清輝日記』の大正五年五月十二日の項を見ると、「午後一時半主任會議ニ出席ス 圖按家鹿島〔英二〕保田〔安田祿造のことと思われる。〕の二氏ノ工業圖案科新設案ノ説明アリ 右兩氏退出後島田〔佳矣〕氏ノ大反對論ヲ聽キ四時半ニ至ル」とあり、図案科主任教授の島田佳矣が先ず大反対であったことがわかる。黒田自身の考えは何も記されていないが、当時彼や西洋画科教官たちが岩村透および国民美術協会が提出していた東京美術学校の「純正美術」学校化案に与していたことを考えれば、もとより賛成したとは思われない。また、小場恒吉（当時は図案科助教）はこの件について後年次のように記している。

明治三十年頃のことと思ふが、高等工業學校内に二年制の工業圖案科といふものが出來た。間もなく長く米國を放浪されて居た洋畫家の井手馬太郎といふ人を科長に据えた。これは専ら西洋の鑒に倣ふて現代に既する平易な實用向き圖案を描くにあつたので、美術學校の圖案の如く日本の傳統を根帶としての高尚なる趣

味のものとは同日の論でなかつた。然るに難を避け易に就き易い人情の常として、一時は相當の勢力を振ふ様になつたが、後年高等工業學校が單科大學に昇格運動に際し、圖案科の如き數學拔きの科があつては邪魔になるので、逐出され臨時美術學校に借家同居することになった。其際此の科長安田祿造氏は工業圖案の必要を説き、美校の圖案を併合しようと謀り古宇田〔実〕先生等は之れに賛同されたが、正木校長は之れを退けられたことは詢に偉功の一つである。

（『東京美術學校校友會誌』第十九号皇紀二千六百年創立五十周年記念号。昭和十五年十月）

工業圖案科合併案を退けたのが正木であるというのは、問題の経緯からすれば小場の誤解であると思われるが、要するにこの文は、小場も合併案に強く反対したことを示している。彼の言うように、本校図案科の人々には自分たちの図案は日本の傳統を根帶とする高尚な趣味のものであり、工業圖案科のそれは低級なものであるという意識が強かった。一方、工業圖案科の人々は、先きの松岡寿の発言に明らかなように、普通実用品の美化を主眼とする自分たちの図案こそ国策上、また世界の図案の大勢から見ても有効なものであると考えていた。かくて、双方の考えは氷炭相容れず、遂に正木校長も計画を断念せざるを得なくなったのであった。

なお、工業圖案科復活計画が挫折するや、直ちに安田祿造は「本邦工芸の現在及将来」と題する長い論文を『時事新報』（大正五年十一月〜十二月）に投じ、そのなかで輸出工芸振興の必要性、方法等を

説きつつ工業図案科の教育理念に基づいた新式の高等工芸学校の設置を熱心に訴えた。彼はまず

工業とは機械的たると化学的たるとを問はず各般の事物或は各種成品の材料及原動力となるべきものを製造する仕事を云ひ工芸とは工業により製出せられたる材料を用ひ之に美術的の技巧を加味して實用的或は裝飾的成品を作ることといひ又美術とは社會の利用實用の問題を超越し宇宙の美を探究し之を技術の上に現はす技巧を云ひ又美術工芸は工芸の頗る美術に偏したるものにして一般工芸が他を標準として工芸の經濟的價值を増大せんと欲するに反し美術工芸は自己を標準とし自己の理想と技巧とを工芸の上に發揮せんとするものなり、

と言ひ、美術、美術工芸、工芸、工業をはっきり區別してそれぞれの目的に応じた奨励法を講じる必要があるとし、次いで、工芸（經濟的工芸ないし輸出工芸）に関する西欧諸国の状況と日本の現状とを細かく對比して日本工芸不振の原因を究明した上で十二項目の發展策を示している。そして、別項を設けて工芸教育振興の必要性を説いているのであるが、そこではまず工芸教育の現状について次のように述べている。

工藝が今日まで冷淡に放擲されたる如く工藝教育も冷淡なる取扱ひを受けつゝありしは何人も否む能はざる事實なり 試みに我國工藝教育の狀態を見よ 其教育機關は高等のものにありては東

京美術學校及京都高等工藝の二校に過ぎず 又中等程度のものは東京、石川、富山、香川等の四縣に各一校宛之あるのみなり 勿論今日までは高等工業學校或は地方工業學校に於て多少工藝的科目を課し來たりたるものありしが近來何處の工業學校も工藝的科目を廢し製造工業に専心する傾向を來し現に東京高等工業學校に於ては曩に金工科を廢し製版部を廢し工業圖案科を廢し工藝的方面は之を排除し學理を基礎としたる製造工業に力を注ぐに至れり是れ工業發達の經路に於て必然來るべき現象にして從來の如く二兎を追ふが如き教育は實際の効果を擧ぐる能はざるものなり此の意味に於て近時の傾向は工業の一大發達を得べく又一面には工藝興隆の曙光とも見るを得べきものなり 斯して工業教育今や一革新期を通過しつゝあると同時に他方には大に工藝専門の教育を起し其發達を計るは焦眉の急に迫れる問題となれり

そして、ドイツにおいてその工芸教育制度が工芸の飛躍的發展にいかにか寄与したかを述べ、日本もそれに倣つて新式の工芸學校、つまり、電気、機械力、化学を利用して人力を省き、容易に精巧美麗にして安価な製品を作ること为本旨とする學校を設けなければならぬとし、当面は東京と大阪に高等工芸學校を置いて工芸の人材養成につとめると同時に東京美術學校と京都高等工芸學校の内容を改善し、純正美術と美術工芸の最高学府たらしめるべきであるとしている。

以上の安田の主張が文部次官松浦鎮次郎をはじめとする文部省の要人を動かし、また、折り良く原内閣のもとで高等教育擴張計畫案

が可決されたため、大正十年に東京高等工芸学校の設立をみたと言われる(馬場秋次郎「創立当時の思い出」『創立40周年記念』昭和三十六年。千葉大学工学部)。

安田は本校へ委託された工業図案科生徒全員が卒業したあと、大正六年七月に本校兼任を解かれた。鹿島英二は同五年に一旦本校専任となったが、彼もまた同八年には辞職した。左記の文書にはその「工業的」授業法が本校の教育目的に適合しないという理由で辞職に決定したことが明記されている。

休職上申理由

東京美術学校教授 鹿島 英二

右ハ先年東京高等工業学校ノ工業図案科生徒ノ教育ヲ本校ニ委託セラル、ニ方リ同校教授ヨリ転任シタルモノニ有之候處同科生徒ハ既ニ一昨年七月悉ク卒業シ了リ爾來本校圖案科第二部ニ課スル図案法及実習授業ヲ担任致サセ居リ候處同人力授業法ハ工業的ナルヲ以テ美術家ヲ養成スル本校教授トシテハ不適任ニ付此際他ノモノヲシテ代ラシムルコト、ナシタルカ故ニ休職上申致候次第第二有之候也

(「大正八年職員ニ関スル書類庶務掛」)

⑫ 二科会発足

大正三年十月十日から三十日まで上野公園竹の台陳列館で第一回二科会美術展覧会が開催された。日本画界に院展が登場したのと同じ時に洋画界にも二科展という公募展が生まれ、ともに文展と対峙し

て在野派の勢いを示すようになったのである。二科会は印象派、後期印象派、フォーヴィズム、立体派、未来派などの西欧近代絵画の新様式の移入を歓迎しつつ特に大正期において幾多の個性的作家を育て、日本の近代洋画に一つの成熟を齎すのであるが、これが外光派アカデミズムに飽き足りないものを感じていた本校卒業生や生徒にとっても格好の活躍舞台となったことは言うまでもない。二科会発足以前、明治四十二年には斎藤与里が帰国してフォーヴィズムの影響を受けた作品を公開し、同四十三年には新様式の洗礼を受けた藤島武二、湯浅一郎、有島生馬、南薫造、山下新太郎らが次々と帰国、同年創刊の『白樺』は盛んに印象派、後期印象派を紹介し、高村光太郎が芸術表現の自由を唱えて美術評壇で活躍した。その中で、本校生徒たちがアブサント同人小品展を開き、後期印象派の影響色濃い作品を発表したり、卒業したばかりの山本鼎らが新しい芸術を求めて『方寸』を発行したりしている。そして、大正元年秋には岸田劉生、木村莊八、斎藤与里、萬鉄五郎、真田久吉、松村巽、碓伊之助、清宮彬、高村光太郎ら青年たちがフューザン会第一回展を開き、後期印象派やフォーヴィズムの影響を受けた作品を発表した。同会が翌二年に第二回展を開いて解散したあと、アカデミズムに反抗する若手作家たちが作ったのが二科会であった。その結成の背景や経緯については諸書に取り上げられているので、ここでは石井柏亭著『日本絵画三代史』(昭和十七年。創元社)の「二科会と海外の新潮」の展覧会概況の部分引用する。なお、参考のため「」に本校西洋画科卒業年度等を附記する。